

「空に潜る」
佐直麻里子 作品解説

例えば、日本庭園における自然とのつながりや関係性にとっても惹かれます。今展では、大きな自然のようなものと接続するというのを大きな自分のコンセプトにしています。

「ハレ」 和紙、岩絵具、鉛筆 2016

金沢アートグミは壁面が少ないこと、また空間的なアプローチもしてみたいという自分の思いもあったことから、この大作をメインに制作をしました。空間中央に絵を吊り下げ、表からも裏からも鑑賞できるようにしました。人が通ると風で揺れ、絵画の存在自体を何か重たいものから解放するような心地よい感覚があります。

民俗学においては、儀礼や祭り事の事を”ハレ”と呼びます。日常の穢れを浄化するものを”ハレ”と解釈し、本作は、自分が普段関わることのない目にみえない大きな世界とつながるための装置、もしくはそういった感覚を引き出してくれるものとして考えています。

作家の法貴信也さんの「表は裏のことを考えないが、裏は表のことを想像する」という言葉をきっかけに、裏と表の両面から絵を描くというアプローチをしたいと思っていたのを実践しました。和紙は裏からも表からも描けるので、光を通す存在であり表裏どちらでもある。そういった絵を目指しました。

また、「ハレ」に関係するように、ステンレスのワイヤー、鏡面、石を設置しました。

絵には枠があって、襖絵とか屏風絵も結局線で区切られてしまう。区切られたところから外の風景を見たときに、線があるのとないのでは大分意味合いが違うなとずっと思っていました。今までは画面上で線を引いていたのですが、今回はそれを 3D 空間に持ってきて、人が動くことで線の位置が変わり、それがどう見えるのかを試したかった。

更に無意識の要素みたいなものが欲しくて、「点」のようなニュアンスで石を置いて、鏡面を敷き、「光」を反射させ、意図しない光がきらきら浮かんでいくような形にしたい。考えた結果、このような構成になりました。

「空について」 和紙、水干絵具 2016

金沢アートグミに窓があることは知らなかったのですが、会場を下見した時に見てみたらきれいに空が映えているなど感じました。今回タイトルが「空に潜る」というものだったこともあり、外の光を透過させるような作品を空間に合わせて作りました。私の中で、空と外の記憶が繋がっているのですが、そういったイメージを象徴する作品として置いてみたかったのです。

窓はくもりガラスですが、朝、昼、夜と光の加減が異なります。昼の光は勿論、夜の光もすごくきれいです。基本的には青黒っぽい感じのグラデーションに赤信号の光で下の方がうっすら赤くなっている。すごくきれいで、ここで展示できてよかったなと思いました。

「止める」木材、岩絵具、ガラス 2016

これらは製材所から貰ってきた木の皮等を使用しています。空間をみながら浮かんだひらめきで、実験的に作りました。

作品を通じて大きな自然のサイクルを感じる部分が欲しくて、器や太陽等何かを宿すようなものを描いたり、腐食して折れた木の断片に金色を塗ったりしています。これ以上浸食がすすまないようにという祈りにも似た気持ちを込めて。

「宿り木 (杉)」シナベニヤ、鉛筆、墨 2016

山に登った時にとてもしてきな木があって、ご神木ではなかったのですが、ご神木みたいだなと感じたことがあります。その記憶から、ご神木という自然と人間をつなぐ装置を象徴しました。手前に雁皮紙を貼ることで、近くにくると見えにくく遠くにいくと見えてくる効果があります。

「一片」和紙、岩絵具、鉛筆 2016

和紙の表と裏に描いたらどうなるかという実験のドローイングです。裏に描いたものがどのくらい見えるかなと、ちょっとずつ表裏ずらしながら格闘しました。本作はその軌跡ですね。

四角を保ちつつ四角から抜けるという意識があって、箔を貼り、円を描き、シルエットとして木の葉っぱみたいな要素をいれる。それから自分で描いていて気持ちいい線を追加していきました。習字を学んでいたこともあり、字を書くのも好きなのですが、線を適当に引いていかにも文字のように見せるという遊びをしていたことがあって、その遊びの要素もあります。

今後の作品アイデアの1つとして、描いた絵を土に一回埋めてみたいなと思っています。それがどのように自然に壊され、変化していくのか。作品を掘り起した時に、どのような状態になるのかというのが気になっています。大きな自然の流れに自分の制作を添わせるようなことをしていけたらと考えています。

2月7日(日)「空に潜る」展オープニングトークより

編集：上田陽子